

「闡提」の語を使ったことは確実であろう。ところが、『出三蔵記集』所収の「六卷泥洹記第十八出経後記」(大正55・60・b)によれば『六卷泥洹経』の訳出は義熙十三年(四一七)十月一日と明記されており、謝靈運の『仏影銘』が作られたのが通常考えられているように義熙九年(四一三)の秋だとすると、謝靈運は『六卷泥洹経』訳出の四年も前に「闡提」の語をすでに知っていたことになり、年時の推定に齟齬を来すことになる。『六卷泥洹経』の訳出以前に、謝靈運が法顯から直接口頭で「闡提」の語の存在を教えられていたとすれば矛盾が生じないが、そうすると法顯には梵本を読み、それを漢語に移し換える能力があったかどうかが問題になってこよう。むしろ謝靈運の『仏影銘』制作年時を『六卷泥洹経』が訳出された義熙十三年以降まで引き下げるのがあるいは妥当かもしれない。しかししづれにせよ請求されたばかりの新思想をさっそく自己の文章に用いるところなど、「衣裳器物は多く旧制を改む」(『宋書』謝靈運伝)とされ、とかく新奇を好んだと伝えられる謝靈運の性格の反映であるかもしれない。

(未完)

朝鮮通信使招聘における 彦根藩仏教寺院の役割

竹内真道

江戸時代、徳川幕府は、豊臣秀吉の侵略により断絶していた朝鮮^①との国交を回復するため、朝鮮からの通信使を招聘し、これにより西暦一六〇七年より一八一一年まで計十二回、朝鮮より三百名から五百名にのぼる通信使一行が来日した。

通信使一行は、対馬の宗氏が同行して船で瀬戸内海へ入り、大坂より川舟に乗り淀浦に上陸し、京都へ行く。京都からは東海道を草津へ下り、そこから琵琶湖畔の浜街道を通って鳥居本から垂井へ出、美濃路を通って名古屋を経、東海道を江戸へと向かった。途中、近江の彦根では、浄土宗の宗安寺がその宿所に定められていた。

今まで宗安寺には通信使に関する文献は何もないとされてきたが、最近宝暦十三年の『朝鮮人御馳走御用御入用積作事方萬仕様帳』(以下『萬仕様帳』と略す)という記録が見つかった。

以下はこの『萬仕様帳』を中心に、通信使来日時の彦根藩仏教寺院の役割について調べたものである。

まずこの『萬仕様帳』には、寛延元年の時の通信使一行の彦根での宿所が記されており、それによると、

三使旅館	宗安寺(浄土宗)
中官宿	大信寺(浄土宗)
下官宿	明性寺(浄土真宗本願寺派)
官人荷物宿	蓮華寺(日蓮宗)
長老宿	江国寺(臨済宗妙心寺派)
長老宿	善照寺(浄土真宗本願寺派)
通詞下知役宿	上魚屋町 八右衛門
通詞宿	同町 久左衛門
	願通寺(真宗大谷派)
	法蔵寺(浄土真宗本願寺派)
	理心院

白壁町	源右衛門
同町	伝次
紺屋町	伝介
元川町	弥次兵衛
上魚屋町	九兵衛
職人町	伝兵衛
下魚屋町	角田半四郎
本町	磯部三郎兵衛

(寺院名下の括弧内は現在の宗旨を筆者が記入)

とある。通信使一行が宗安寺を中心に、その近辺の寺院、さらには武家、町人の屋敷に、役職別に分宿したことがわかる。従来、宗安寺が通信使一行の宿所といわれてきたが、それは三使(正使・副使・従事官)の宿所であって、中官や下官等は他の寺院に宿泊したのである。その寺院も浄土宗、真宗、禅宗、日蓮宗とあらゆる宗派にわたっている。

さて、通信使一行宿泊にあたり、『萬仕様帳』には寛延元年の御作事方御修履仕様として、宗安寺では

本堂南縁之間仏壇取の希廻り屏風田同考分木綿紺御幕ニ而仕切老官居所ニ補理同湯殿雪隠建

同所統束之間を右同段ニ田上判事押物判事次上判事居所ニ補理同湯殿雪隠建

本堂仏前三方唐紙屏風ニ而田同上明キ其分木綿紺幕ニ而仕切対府御役人衆詰所ニ成衆寮仏壇取のけ三使輿部屋ニ補理

とあり、また中官宿大信寺も

本堂仏前仮囲ひ唐紙立卷分木綿紺まくはり

とあり、下官宿明性寺も

本堂仏前唐紙ニ而仕切卷分紺幕張り

とある。本堂の本尊を唐紙屏風で囲ったり、本尊以外の仏壇を取りのけたりして官人の居所や、対馬藩役人の詰所にしたりしている。また宗安寺の本堂には、新たに湯殿雪隠を建てている。宿所となった寺院は仏教の法要等ではできない状態である。それでは僧侶たちはどうしたかといえ、宗安寺に宝暦十三年の『御老中方より被仰出候御書付之写』という古文書があり、そこには

一 米札銀五枚 御当院宗安寺

右者此度朝鮮人御用ニ付平田町称名院江如先例引移可被申處人数多クニ毛有之間

狭ニ而者指當リ難義仕候由……

とある。これは、彦根藩老中より寺社奉行へ、宗安寺に米札銀五枚を渡すようにとの内容の書付なのであるが、その渡す理由が右の通り、朝鮮通信使の宿所に宗安寺があるため、先例の如く、宗安寺の分院である称名院へ引移ったが、狭い所に人数多く移ったので難義しているからというものである。ここから、宗安寺の僧侶たちは、宗安寺が通信使の宿所となった時は、皆別所へ移ったことがわかる。寺の建物を彦根藩の役人に渡して、通信使の宿所となっている間、宗安寺の僧侶たちは他所に引越していたのである。

そうすると、僧侶は、通信使一行とは直接交流がなかったかといえ、そうとはいえない。享保四年の通信使一行に製述官として随行した申維翰の著わした『海游録』には夜、諸文士と唱和す。僧あり、名を素盈、号を隣溪という。みずから言うところによれば、彦根山竜潭寺にあり、市をへだたることわずかの距離という。法統は臨済宗派三十八代目であり、行年三十七歳、法臘(僧歴)二十二年。余と筆談したが、すこぶる才敏にして、詩もまた情を写す。

とあり、彦根竜(龍)潭寺の僧と筆談したことが記されている。学問のできる僧侶は通信使一行の文官たちと会い、交流したのである。ただし、その内容は仏教のことよりも、漢詩などが中心であったようである。

以上のことより、通信使一行の来日にあたり、彦根藩の仏教寺院は、その宿舎として利用され、接待等は藩の役人がし、僧侶はその間寺を離れた。仏教的な交流はなかったようである。しかし現在も、宗安寺には通信使一行の残したと思われる李朝文官

の肖像画があり、江国寺には通信使の書史の金義信(雪峯)筆の額がかかっている。これらの残されたものを見れば、仏教寺院は単に建物だけが宿舎に利用されたというのではないであろう。なお、宗安寺に残されている李朝文官肖像画と、宗安寺表門横の通信使接待の勝手口に使われたといわれる黒門には、色々の問題点があり、『萬仕様帳』のこととともに、機会があればいずれ述べてみたい。

註① ここでいう朝鮮は李朝朝鮮である。

② 中村栄孝著『日本と朝鮮』至文堂発行 二〇四頁。

姜在彦訳注『海游録』東洋文庫二五二 平凡社発行 三三〇頁。

③ このうち初めの三回は使節名称は回答兼刷遣使である。(姜在彦訳注『海游録』三三二頁)

④ 姜在彦訳注『海游録』三三二頁。

⑤ 中村栄孝著『日本と朝鮮』二二五～二二六頁。

⑥ 芳賀登著『日韓文化交流史の研究』雄山閣出版発行 二八頁。

⑦ 通信使一行の構成については、中村栄孝著『日本と朝鮮』二二二頁～二二五頁。

⑧ 姜在彦訳注『海游録』一五〇頁。

⑨ 通信使一行の参向・帰国の道中、沿途の大名たちが舟や人馬を出し、道路や旅館を修理し、警固につとめ、接待の費用をまかした。(中村栄孝著『日本と朝鮮』二二七頁)

⑩ 李進熙著『江戸時代の朝鮮通信使』講談社発行 一六九頁～一七一頁。

(謝意) 『萬仕様帳』を読むにあたり、元京都府立総合資料館古文書課資料主任 橋本初子先生、佛敎大学 福原隆善先生、及び京都上善寺古文書の会の方々の御教示を受けたことを、深く感謝申し上げる。

『女人往生伝』覚書

笹田教彰

『女人往生伝』(上下二巻)は、これまでわずかの刊本の存在が知られているだけであったが、このたび大谷大学図書館蔵の一本が、石橋義秀氏によってはじめて翻刻された。